



『函西さっぽろ』

つづじヶ丘同窓会札幌支部会報

第10号

2013年8月1日
発行部数:2000部数
発行責任者:事務局
編集長:田澤義公

志高く

理想を求め、
真理を探求し、
情採豊かに生きる

つづじヶ丘同窓会札幌支部に寄せて

札幌支部長 林 寿正

皆様にかかれましては、お変わりなくお過ごしのこととお慶び申し上げます。私たちのふるさと港まち函館は、遠く札幌に住んでおりますといつも懐かしさや最新の話題がとても気になるものです。

七月末に開催された地元ロックバンド「GLAY」の緑の島野外ライブコンサート時、メンバーのTAKUROさんが、今、何故函館開催だったのか?の間に、20周年を迎えた現在、自分たちが生まれ育ったふるさとと函館をここから愛しそして感謝し、また函館の魅力をもう一度見直して広く知らしめたい・素晴らしい函館を全国へそして世界へ発信したいと言っておられました。子供の時の思い出の多くが西高の近辺・函館山を中心にとっても多かったそうです。先日、函館都市景観審議会の方も函館の魅力は西部地区に集中している。過去も将来に新幹線が開通し高速道路が繋がっても古き良き西洋文化の数々と今後の新しいものがコラボしていけば、飽きさせることなく情緒溢れる函館のまちが輝き続ける事でしょう。

そんなふるさとと函館を誇りに思います。

函館は、開港150年余りの中で、もうすぐ西高は110周年を迎えます。道内でも屈指の歴史がある伝統校を共に過ごした私たち・その後それぞれに様々な人生を歩み、ご縁あって札幌で繋がっている中、年

に一度それぞれの思いを抱いて集う同窓会は、なんと素敵で素晴らしい巡り合わせでしょうか? 今、世の中は歴史的大変革の中で、「デジタル情報革命によって戦後からの真実が明かされ、本物の時代が到来しようとしています。科学の進歩は想像をはるかに超えて突き進んでいる中で、やはり人との絆、つながりを意識して素敵な人生を過ごしたいと思えます。

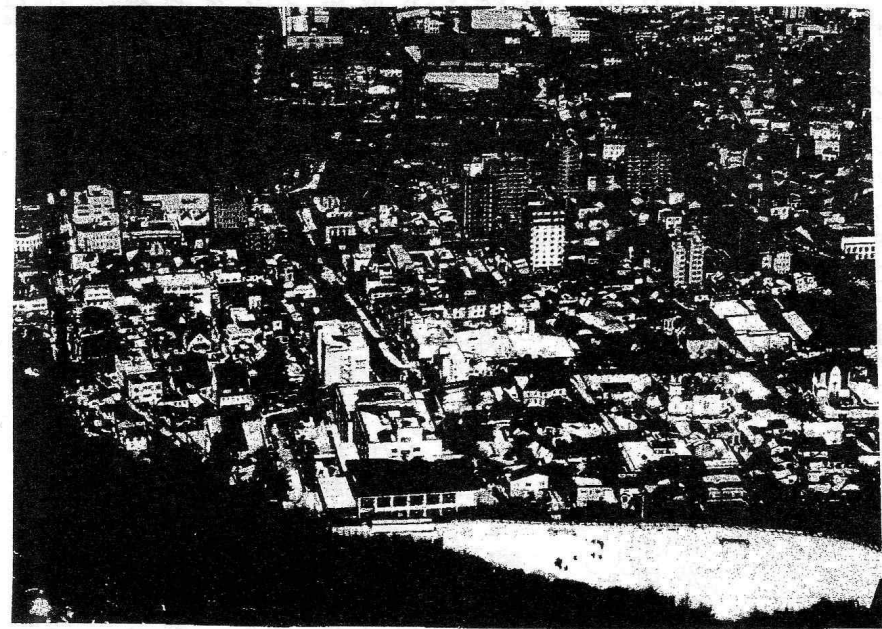
札幌支部は、他校の同窓会との交流を重ね、「函館ふるさと会」に向けて進めております。このような時代だからこそ、あらゆるご縁を育んでおりますのでご支援の程宜しくお願い致します。結びに、同窓会を通じて皆様の更なるご健勝とご多幸をこころよりお祈り申し上げます。ありがとうございます

なつかしい思い出・・・

坪田 貞子(昭和20年入学高女)

「函西さっぽろ」大変なつかしく、同期の方の名前を拝見してペンをとりました。私達は昭和二十年四月の入学で、それはそれは大変でした。入学すぐ校舎内での奉仕でしたが、軍服のボタン付けにはじまり、朝早く列車に乗り七重浜の農家での素手のイモ掘り・・・。八月十五日の玉音放送は農家の庭先で雑音の強い意味不明の放送でしたが、農家

の方はなにか沈んでいる様子。帰り七重浜駅に集合したときに三年生が放送の意味が敗戦と分かったらしく、それを数人で話していたら引率の先生に往復ビンタをはられ、訳もわからず列車に乗ったものでした。私は寄宿舎生活でしたので今では考えられない日々でした。七月十四日の大空襲の時は、今は校舎が建っているようですが、穴間まで続いているといわれた洞穴で軍の通信隊の片隅で避難したものでした。つらかった学校寄宿舎での生活も今はなつかしい思い出です。



「遭遇と邂逅」

生存のリスクに思う事

戸根谷 法雄(21回生)

1. リスクマネジメント

2010年6月のある土曜日の朝・・・

昨夜、息子が久しぶりに我が家に泊まった。

仲間内との飲み会で朝帰りしたらしく、起きてきたのが9時すぎだった。

こっちは一週間続いた風邪のせいで不定期な睡眠状態のまま、このときばかりはと跪く愛犬を横目に遅い朝食中だった。

「お父さん、リスクマネジメントっていつから始めたの？」

「ん・・・5年位前からだったかな・・・」

「今も続けてるの？きつかけは？・・・」

「大学院で先生に教えてもらい、それから・・・で、どうした？」

息子は中学校の教師だが体育学習の担当らしく、昨年の事故を教訓に安全対策を考えているが管理者と意見が合わないらしい。

というより取り合ってもらえない様子だ。

リスクマネジメント事例研究的に言う・・・

『昨年6月、某中学校の課外活動中に男子生徒が体育館で転倒し意識不明のまま救急病院に搬送された。事故直後の救命処置が適正に施されたことにより、幸い意識は戻りその後順調に回復した。生徒の私病が主原因と判断されたが、この事故を踏まえ担当者として再発防止策とさらなる安全対策を講じたい

が、事故の発生は偶発的であり再発可能性は極めて少ないとする管理者との意見の対立である。』となる。

対立といっても立場上、担当者に決定権はないわけだから、結局何もできなくなるのは自明の理である。

「リスクマネジメントの初歩を知りたいんだけど、教材はあるの？」

「ん、あるよ。後で適当なのを探しておくよ。」

そんなやりとりの後、朝食も終わり息子が帰るとい

うので『リスクマネジメント概論』を渡した。

「夏休み中に読んで返すよ。読み終わってから次にいいのがあったら又借りるよ。」

「返すのは急がなくていいよ。」

「読んでみて興味があれば、資格でも取ろうかな？」

「知識や理論じゃなくて、一番大事なのはいかに実践するかだよ。」

「ちよつと世間知らずの職場だから・・・一般社会の様子を知ろうかなと思って・・・」

教師という仕事とバスケットボールに忙殺される毎日の息子でも、最近何か考えるところがあるらしい。

話は最近のDVD鑑賞に移り、購入してきた『ショーシャンクの空に』を「これは名作だ。」といったら興味を示し、このDVDと『リスクマネジメント概論』を持って息子は帰っていった。

本当はDVDより読ませたい本があった。

教育、医療、福祉といった社会生活において日本の現状とははるかにかけ離れている『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』である。

しかし、今の息子の心理状態ではまったく関心がないらしい。

理想的といわれる教育のあり様を知ることよりも、現実には直面している安全対策に頭の中は追われていく状態だ。

企業不祥事が発覚する組織に蔓延する「前例主義」、

「ことなかれ主義」、「利益最優先」、「保身」・・・これらを常識とする経営者のように、現場の声を無視して押さえつける権力者はあいかかわらずどの領域の組織にも存在し、不祥事が水面下で日々繰り返されている。

今思えば少し前まで自分は、その世界にいた。

妻が言った。

「リスクマネジメントの使いまわしができて良かったね。」

これまで随分高価な教材費と高い経費を負担させてきたから、皮肉めいて聞こえた。

「教材を読むより、実践的に生徒を巻き込んで進めたい。いつの時代でも権力者に対抗するには群衆を味方につけることだ。」

『ショーシャンクの空に』と一緒に買ってきた『ジャンヌダルク』のDVDを手にとつてつぶやいた。

「生徒から課外活動に対する問題を提起させ、父兄を取り込んだら管理者に勝てるよ。リスクマネジメントは現場のすべてのリスクオーナーがいかにリスク・カルチャーを構築できるかが重要だから、いつてみれば個人のメタ認知能力に関わることだけど・・・」

最近仕入れた知識が独り言になった。

「あなたの言ってることは、さっぱりわからないわ。」

休日の朝、久しぶりの妻との会話もここで途切れ、そのタイミングを待っていたかのように愛犬が前足でおやつを催促してきた。

2. 「ショーシャンクの空に」から

『ショーシャンクの空に』はステイヴン・キングの『刑務所のリタ・ヘイワース Rita Hayworth and Shawshank Redemption』を原作とした映画である。

1994年の公開当時、アカデミー賞7部門にノミネートされながら1つも賞をとることが出来なかった。

しかし、翌年全米のレンタルビデオ部門1位となつてから『ゴットファーザー』や『スター・ウォーズ』と上位争いをするくらい人気が高まり、今では「無冠の名作」といわれている。

この映画のファンは多く、ブログ上でも個人評価や感想が数多く掲載されている。

「最悪の結婚生活や離婚を乗り越える力をくれた。人生最悪のときや重い病気にかかったとき、愛する人を亡くしたとき、励みになった。」

といったメールが監督・フランクのもとに、映画公開後十数年を経た今も無いこんでくるといふ。

この映画のキーパーソンであるアンディ・デュフレールを演じたティム・ロビンスは「これは、希望と、そして男性の友情を描いた希少な物語なんだ。」と語る。

《あらすじ》

妻とその愛人殺しの容疑で、無実にも関わらず終身刑となり、ジョーシヤンク刑務所」に投獄されてしまう若き銀行副頭取・アンディ(ティム・ロビンス)。不条理や束縛、性的、肉体的暴力を受けながら希望を失わず20年後、遂には脱獄に成功し「記憶のない温かい場所」を得る。

一方の主人公レッド(モーガン・フリーマン)は、この世界の先輩としてアンディに「刑務所で希望をもつのは禁物だ。肝に銘じておけ。」と忠告するが、アンディの脱獄から数年後仮釈放となり、やがて彼の元を訪ねるのだった。

レッドにとって、塀の中では「正気を失わせる危険なもの」であった「希望」が、ラスト・シーンでは「無事に国境を越えられるといい。親友に会って握手ができるといい。太平洋が夢で見たように青いといい。希望を持つとう。」と変貌していく。

テーマである「希望」については、この映画を題材にして東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトチームが詳細に論評しているのも興味深い。

アンディの言葉に「頑張って生きるか、それとも頑張って死ぬか。」がある。

人は「絶望」に直面した時、他人が口にする「希望」は絵空事に感じることがある。

単なる慰めの言葉でしかないときもある。

「生き続けること」と「この場所に存在する意義」はなんだろう？

ずっと抱き続けていく疑問なのかもしれない。

この映画で、囚人の誰もが望む仮出所という「希望」を50年間の服役で実現した老囚人ブルックスが出所後、変容しきった塀の外の世界に馴染めず自らの命を絶つというシーンがある。

壁に彫った文字「BROOKS WAS HERE (ブルックスここにありき)」が印象的である。

人は「存在する意義」を失ったとき、「自らの死」という選択をするのかもしれない。

レッドの言葉に「この塀が曲者なんだ。最初は憎む。それから慣れる。時間がたつと頼りにしてしまう。」がある。

人は一人では生きられない。何に帰属するのか？ 帰属する場所は「塀の内か、外か・・・」ブルックスにとつての「安心する場所」は塀の内であった。

塀の内にいるのは罪人である。しかし外にもそれ以上の悪いヤツは大勢いる。

それが不条理というものか・・・。不条理を当たり前とした社会で、慣れきった組織に帰属してきた自分は「存在する意義」を求めながら、これからどこに新たな帰属先を見つけていくのだろうか・・・と、思った。

投獄前、アンディは銀行副頭取という立場にあった。当然、信頼される顧客や仕事上のライバル、腹心の部下など様々な人間関係があったはずだが、この映画では一切触れられていない。

境遇が一変する中で「よりどころ」としてしがみつきたくなる過去の人間関係。

それらは現役ゆえに成立する「利得」上の関係であった。期待すればするほど失望感と自虐さが増幅するものなのだろう。

そんなことを考えさせられた映画であった。

人には生まれてから現在に至るまでいくつかの分岐点があり、そのつど何かに帰属している。

自分にとつて人生大半の時間を帰属してきた「会社」という組織。

定年退職を身近に感じ始めた頃、一度は消えたハズの転勤異動が突然発令された。

初めての単身生活は「ノルマ」と「不規則生活」の末に「闘病」というお荷物を抱えて早々と終わりを告げた。

おとぎ話「浦島太郎」が頭をよぎる中、期待と不安、そして少しばかりの使命感で、単身赴任前の職場にリターンした。

サラリーマンの世界ではよくあることだ。所属先は「本社」のまま、所属長として勤務した職場に職権もノルマもない「駐在」さん。

初日、形通りの歓迎セレモニーで、ここに存在しなかった期間がもたらした冷ややかな空気は「活気ある職場」という期待感を早くも消し去ってしまった。上目遣いに馬鹿丁寧な「ヒラメ社員」。コンビニ食で昼寝を貪る営業マン。無視を決め込む管理職。

暖房の効きはじめてこのオフィスの中でさえ、さつきまでの初冬の景色と同様のそぞろ寒さを感じてしまう。

これが、この職場の長として「ノルマ達成」に闇雲に走り続けた結果への返礼なのだろうか・・・。

「こんなもののためにオレは・・・。」怒り、あきらめ、後悔、自責、色んな思いが目まぐるしく渦巻く中で、努めて冷静に考えようとした。思い起こせば、この感情はこれまでの人生で何度も経験したはずであった。

「環境の変化は思考の変化を促進する。」

「社会とのかかわり」いわゆる社会との関係性の量が、ときに生死を左右する心の分岐点において大きく影響する要因だと思ふ。

12年間連続している3万人を超える自殺者。(2010年現在)

平成20年度の統計資料では15歳から40歳までの年齢

層において死因第一位が「自殺」である。自殺対策基本法なるものが平成18年に制定されたらしい。「コミュニケーションの喪失」や「セーフティネットの崩壊」が叫ばれる現在、あきらかに社会がこわれている。

一方で「世論の誘導」という情報の暴力が今も蔓延している。

およそメディア専門家とされる連中は出演するメディアに媚を売り、批判的な発言者は出演が消される。

メディアに影響される国民、メディアを操るスポンサー、スポンサーにすり寄る政治家、

政治家に期待する外国人投資家・・・。

これまで、「ウラ」の仕事を通じて、政治家とのかわりやそれに群がる利権屋との関係、これがキャリアとして重宝されていた組織に所属し、真実が報道されない実態をずいぶん見続けてきた。

環境とともに思考が変化しても、メディアやメディア専門家に抱く懐疑的な感情は今でも収縮することを覚えないでいる。

自殺以外の主要死因である「不慮の事故」や「悪性新生物、心疾患、脳血管疾患等」の病気による生死の分岐点には「運」が大きく影響する。

実際、怪我や疾患の程度、初期対応、迅速性、医療機関や医師との関係性にそれは大きく作用している。

「存在する意義」は生存のリスクに通ずる。

生死の分岐点を一度経験すれば「死」というものかわかりかける。

生死の狭間に「運」があるなら、生に対する執着心が免疫力を生み「運」を多くしてくれるのかもしれない。

現実問題として、「どう生きるか」の前に「なぜ生きるか」という疑問が生じる。

「ショーシャンクの空に」でアンディを演じたティム・ロピンスは「彼（アンディ）は、ただ生きたかっただけなんだ」と言う。

「同じ毎日を送ることで、『感覚』が死んでいくの

が許せなかったんだ。ただ、生きている実感が欲しかったんだ。」と・・・。

今、実感している記憶と感覚が生死の分岐点を偶然の連続という「運」によって乗り越え「覚醒」したとき、以後の人生に新たな価値観が生まれてくるような気がする。

4. 「遭遇」と「邂逅」

一見、偶然を装った必然の連続が「分岐点」で作用して現在があるのだろう。

「偶然」としか認識しなかった事実を、時間の経過が「必然」へと変化させる。

自分史をふりかえったとき、大半がそうであったと感じる。

夜間短大から大胆にもチャレンジした大手企業の入社試験。

不合格から入社への道を開いてくれた初めての上司（生涯の師）との出会い。

以来、経験を積んできた営業マンとしての「オモテ」のキャリアと「業界担当」という「ウラ」の人脈形成と受注活動。

現状に限界を感じる中で、当時の上司に反対されながらも再び夜間の大学院に学んだこと。

その大学院で尊敬すべき指導教授に巡り会えたこと。そして、リスクマネジメントというものの存在を教えられたこと。

社会人として改めて学ぶ学問は、おおげさな言葉で乾いた砂に水が吸いこまれていくように、これまでの経験に理論的根拠を付与して単なる経験談を「経験値（知）」に変えていくように浸透してきた。

偶然の出会いには「遭遇」と「邂逅」があるという。

たとえば、登山途中の山道で熊とバッタリ出会うことは「熊との遭遇」になる。

命からがら逃げ延びた山小屋で出会った人物・・・。

登山の専門家であり過去に何度も「熊との遭遇」、

験していた。

さまざまな対策を教示してくれたことがきっかけで生涯の師となる。

このような出会いを「邂逅」という。

リスクは「不測の損失」というのが一般的である。損失だけなら「遭遇」となるが、マネジメントは「うまくやること」と考えれば、リスクマネジメントは損失を事前にうまくコントロールして利益に変えることを可能にする。

そういう意味でもリスクマネジメントとその存在を教示頂いた指導教授は自分にとって、まさに「邂逅」であった。

数学や統計学を用いてリスクを定量化しコントロールする経済性重視のマネジメントがこれまでのリスクマネジメントの中心であった。

「社会がこわれている」中で、先を見通す能力と広義のリスクマネジメントが真に求められている。

リスクマネジメントの一手法としてリスクコントロールがある。

個人レベルでは自己のマインドコントロールが必要であろう。

そのキーワードは「メタ認知能力」である。

人間が自分自身を認識する場合において自分の思考や行動そのものを対象として客観的に把握し認識すること。

それをおこなう能力を心理学では「メタ認知能力」というらしい。

現在進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識することにより自分自身の認知行動を把握することができるとされている。

そんな「メタ認知能力」というコトバと、ある日突然かわりをもつことになる。

5. これまでのリスクマネジメント

2010年6月、快晴の昼下がり・・・。
初夏の大通り公園のベンチ。

かつて、この時間、この場所にいる自分を想像できただろうか。

いかにも都会の公園らしく、喧騒の中にあるやすらぎの空間。

それは決して現実から逃避することを許さず、ひととき休息の場を提供しているにすぎない。

わずかなまどろみから現実に戻り、あわただしく立ち去るサラリーマン風の姿とともに駆け抜けていく風が心地よい。

今、自分にはこの場所にとどまる「時間」は充分にある。

これまで、「時間」とは自らが飛び越えていくものだと思っていた。

空白のない手帳のスケジュールを着実に消化し、仕事中心の日々を過ごしてきた。

多少のトラブルも致命傷にならずそこそこ「時間」が解決してくれたから、明日も、来週も、来月も、来年も、当たり前にあるものだと思っていた。

風景などおおよそ眺めることもなく、ましてその中に存在していただろう自分の姿を振り返ることなどもなかった。

ある日を境に「時間」は「受けとめるもの」に変化した。

歩くスピードが変わり、視界が変わった。

ありふれた風景が新鮮に見え、いつも何かと対峙してきた刺々しい空気が穏やかになった気がした。

少しは鳥瞰的視点が備わったのなら大きな進歩といえる。

実社会の中での経験、営業マンとしてやってきたこと。

気配りと接待の日々。二十数回をかぞえる海外や、国内での接待旅行。

建設業界にコンプライアンスという概念がなかった時代の経験と、「脱・談合」へ移行していく過程で

の「義務感」と「もがき」。
うっかりミスを許さない事前の準備。飽きるくらい
の確認と記録。

管理職としてやってきたこと。常にまとわりつくノルマと不祥事対応。

人間関係の精神的整理整頓。

その果てのメタボ診断と禁煙クリニックでの「メタ認知能力」というコトバとの出会い・・・。

そして、予期せぬ「宣告」と、その数週間前に実行した禁煙がもたらした「運」・・・。

これまで無意識の中でリスクマネジメントをしてきたのかもしれない。

6. 明日への道 日々の暮らしの中で

それは突然の「宣告」だった。

これまでの人生は、一体何だったのだろう。すべてが無意味に思われた。

2009年の7月某日、メタボ診断の再検査結果として、いきなり「肝細胞癌」を告知された。

人々が慌ただしく行きかう東京・お茶の水の交差点。雑踏も喧騒も異次元のような孤独感と、告知された事実だけが重くのしかかり、まるで世界中の不幸を一手に背負い込んだような悲壮感に襲われた。

翌8月、あわただしく単身先から戻り、医療機関で開腹・除去手術を受けた。

執刀医や医療環境、なにより家族の支えがあつて幸いにも存命でき、現在がある。

呼吸不全による生死の境に、わずかな期間ながら「禁煙」が大きく貢献してくれたらしい。

禁煙クリニックでの「メタ認知能力」というコトバとの出会いが運をもたらしたと感じた。

退院後自宅療養の一ヶ月間、現場復帰に向けてのモチベーションとは裏腹に、心の中で人間関係の整理が始まった。

クールダウンには時間を要しながらも、「こいつもか、あいつもか」という思いで整理を進めていく先

に、一体何人が残るのだろうかという奇妙なくらい冷静な自分がいた。

9月末、職場復帰後単身赴任は解かれ、11月「駐在」となり翌年3月、役職定年となる頃には手帳の空白が気にならなくなってきた。

少ないスペースに書ききれないスケジュールで真っ黒になつていた手帳。

これを確認することが毎朝の日課であり充足感と活力の源だと思っていた。

就業規則などそつちのけで人一倍動いてきたと自負する者にとつて、出勤から退社までただ時間の経過をひたすら待つという「窓際族」の日々には、(こ

ういうもんさ・・・)という、開き直りにも似たモチベーションの切り替えが必要となる。

心のどこかで満足していないものがあつても、この「何もしない時間」の代償に生活の糧があるのだから、そうした状態を世間では「いまだき恵まれた処遇」といい、良しとしなければならぬ。

それから三年後、晴れて自由の身になった。

病気や怪我はそのまま「生存のリスク」に直結する。程度によっては「警告」というイエローカードの場

合もあるが、いきなりのレッドカードもありうる。人生の次の「分岐点」ではイエローかレッドか・・・。

生存するためのリスクマネジメントにおいて病気と怪我の対症療法が医療機関と「運」まかせなら、予防医学的には自己のマインドコントロールに頼るしかない。

「ガン」という再発危険性の高い悪性新生物に遭遇した以上、「心がおれない」ようにいかに不安を克服するか、いかに希望を持ち続けるか、その成否は「存続する意義」と「帰属する場所」の有無に大きく左右される。

メタ認知能力をフル稼働させて、モチベーションを保ち続けることが今できる唯一の方法かもしれない。

会社人生の終末期、「何もしない時間」は、犬のよ

うな生活の中で「感覚」が失われていく「扉の内側」と似ている気がしたが、五木寛之氏の「林住期」の如く、「邂逅」を求めて次のステージへ向かうしかないのだろう。

人生の第二ステージへ・・・。

この「分岐点」をどうマネジメントしていくかが、終生の課題になった。

第二ステージがどんな環境であろうと、前向きにメタ認知能力を高めて、リスクにチャレンジし続ける感性和行動力が求められてくる。

これまでの「分岐点」の中で一人立ちの原点ともいえる「八幡坂」の風景と、「利得」とは無関係な「同窓会」も新たな「邂逅」をもたらしてくれるだろう。

これがきつと自分にとっての新価値創造へ結実するはずである。

アンディが目指した「自由な地・ジワタネホ」へ・・・あきらめていた「希望」をアンディとの再会を前に取り戻したレッドのように・・・。

ブルックスが壁に刻んだ、「I WAS HERE」を、自分はどこに、だれに、残せるのか・・・。

自分にとつての「A warm place no memory」（記憶のない温かい場所）は、何処に存在するのだろうか・・・。

明日への道。

日々の暮らしの中で・・・。

リスクにチャレンジすることが「希望」となり「帰属すべき温かい場所」へ導いてくれることを信じた

「ガン」という「生存のリスク」に遭遇し、再発と治療を繰り返す中で少しづつ、答えが見え始めてきた気がする。

(NPO北海道リスクマネジメント研究会)

テレビあれこれ

浅野 元広(18回生)

何気なく、夜、NHK・BSテレビを見ていたら、スイスのベルン市が映っていた。世界文化遺産になっているとのことで、中・近世のヨーロッパの古い町並みをうっとり眺めていた。その終了後もチャンネルをそのままにしていたら、映画が始まった。

「うさぎドロップ」という題名の全く知らない映画だったが、松山ケンイチ主演の大変、優れた作品で最後まで映画に浸っていた。こんなときは、思いもよらず3時間程の時間を得したような気分になってテレビにお礼を言いたくなる。

私は、晩酌後の酔眼で漫然とテレビを見ていることが多い。最近のテレビは〇曜〇〇ミステリー劇場だのといった刑事ドラマが多いが、この手の番組は最初の30分間位はそれなりに面白い。しかし、段々、結末が見えてきて、見終わったときはつまらなさにかっかりして、貴重な時間を返せと叫びたくなることがある。尤も、見たのは自分の責任だから文句は言えないが。刑事ドラマの中で私の好みは「ガリレオ」である。福山雅治の「僕には犯人が誰かなんてことには全く興味がない。興味があるのは、あの密室で何故、犯行が(物理的に)可能だったかということだけだ」なんて言うセリフが妙に格好いい。

話は飛ぶが、私は「優れた報道を行ったメディアを市民の側から評価し力づける」ことを目的とするメディアアンビシヤスという市民グループに参加している。その関係もあってテレビのドキュメント番組を見ることも多いのだが、この方面では、NHK・EテレのE TV特集が絶対にお勧めである。メディアアンビシヤスでも、E TV特集の作品が大賞候補

に上ることが多い。これまで見た中では、永山則夫を取り上げた作品と福島原発事故後の「放射能汚染地図」が特に優れた作品として印象に残っている。

私の子供の頃は、月刊マンガ誌が「娯楽」と「教養」の源泉だった。言葉や漢字の相当部分をマンガ誌で覚えたような気がする。小学6年生の頃、我が家にもテレビが入り、月刊マンガ誌に変わってテレビを見るようになった。この年齢になるまでテレビを見続けているが、子どもの頃のマンガに代わって、テレビが私の「娯楽」と「教養」の源泉になっているようである。今ではそのテレビの地位も凋落し、インターネットがテレビにとって代わっているらしいが、この方面にはなかなかついていけない。

映画館の闇へ

成田 明(19回生)

近頃、シニアのお一人様が増えているそうです。一人で旅行やカラオケなどを楽しむのです。確かにたまには一人のほうが煩わしくなく、気楽なのだろう。私の一人様の場所は映画館です。勤めている時でも、時間を見つけて映画を観ていたが、毎日が日曜日になるとその頻度が増えました。ご存じの通り60歳になると、映画は千円で観ることができるようになります。

それでは、今年に入ってから観た映画の何本かを偏見と独断で紹介したいと思います。

洋画では、カンヌ映画祭パルム・ドール賞とアカデミー外国語映画賞を受賞した「愛、アムール」からです。元音楽教師の老夫婦の妻が病に倒れ、夫が自宅で介護をするのですが、夫が最後に取った行動とは。痛い映画ですが、究極の夫婦愛を描いた秀作です。今年は、「みんなで一緒に暮したら」、「マリーゴールドホテルで会いましょう」、「カルテット! 人生のオペラハウス」など、老後の生き方をテーマの映画が多く公開されています。いずれ迎える老

後をどう過ごすのか、悔いのない生き方をしたいものです。映像が素晴らしい映画を1本「ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した27日」、アカデミー監督賞受賞作です。インドで動物園を経営していた家族が、動物と一緒にカナダに舟で向かう途中嵐に会い、主人公の少年パイとトラだけが生き残り救命ボートで27日間漂流する話ですが、とにかく映像が美しい(当然CGです)。ストーリーだっておもしろいのです。「ジャンゴ繋がれざる者」、高校生のころ夢中になった「続荒野の用心棒」の主題歌が冒頭流れるだけで、感動してしまいました。元奴隷の黒人が白人を殺しまくり妻を奪還する話ですが、血が苦手な方にはあまりお勧めしません。「天使の分け前」スコットランドを舞台に暴行を犯した底辺で生きる青年が、罰に社会奉仕を命ぜられるが、そこでウイスキー好きの指導員と出会い、類い稀な才能が見出される。主人公が行った更生に必要な資金作りの壮大な計画とは、「天使の分け前」がヒントです。この意味は、ウイスキー好きな方はお解りのことと思います。邦画ですが、まずは吉田修一原作「横道世之介」です。1987年、長崎から東京に進学した高良健吾扮する世之介の大学生活と世之介の出てこない16年後の2003年が交互に描かれる。80年代後半の東京の風俗も懐かしいが、世之介の無垢というか誰とでもすぐ友達になることができる性格がもたらす展開が楽しい。恋人役の天然お嬢様、吉高由里子の演技が最高です。本屋大賞を受賞した三浦しをん原作「舟を編む」です。辞書作りの話ですが、刊行まで15年もかかる地味な仕事に取組む人たちの姿とともに、松田龍平の主人公馬締(名字です)の恋愛を絡め楽しませてくれた。

中上健次原作の「千年の愉楽」です。物語は、紀州の路地(被差別部落のこと)を舞台に、「高貴で穢れた血」を受け継いだ3人の若者の刹那的な生と悲劇的な死を産婆であるオリウノオバの記憶として語られています。このところ「連合赤軍」、「三島由紀夫」と左から右まで撮ってきた若松孝二監督

の遺作となった。ロケ地(三重県尾鷲市)の海と斜面に連なる家並みが美しいのと、エンディングの歌が印象的だった。ドキュメンタリー映画から1本「シユガーマン奇跡に愛された男」、90年代初頭デトロイトで歌手としてアルバム2枚を出したロドリゲスだったが、さっぱり売れずいつのまにか音楽会から消えてしまった。その後遠く離れた南アフリカ共和国で反アパルトヘイトの象徴として、アルバムが大ヒットしていました。南アではザ・ローリング・ストーンズよりも人気があり、長きに渡り支持されていた。噂では自殺した、薬物中毒で死んだとかいわれているが、彼の熱狂的なファンがロドリゲスを探し始めました。果たしてロドリゲスの安否は？。アカデミー長編ドキュメンタリー受賞作の元気の貰える映画です。紙数も尽きてきました、最後におバカ映画(ホメ言葉)を2本です。洋画「テッド」は、友達のいない少年が親からプレゼントされたテディ・ベアのぬいぐるみ(テッド)が命を授けられます。二人は一緒に成長して、りっぱな(?)不良中年になります。いつもつるんでいるため、恋人が自分とテッドのどちらを選ぶのかをせまり騒動が起きます。二人の友情は果たして如何に。下ネタがいつぱいの大人のコメディです。邦画では、「HK変態仮面」です。HKは、チケットを購入するとき、変態といいつらい人のために、HKでわかるようににしたとのこと。変態の両親から生まれた男子高校生が主人公です。パンティを被り、必殺技「おいなりさん攻撃」(紙面では書けません)を屈指してスパイダーマンのように悪者を退治します。敵役の安田顕の変態ぶりがたまりません。たまには、こんな映画も観て大声で笑いましょ。さあ、あなたも至福の映画館の闇の中に足を踏み入れてみませんか。

アパルトマン

小山 亜以(37回生)

何度も行っているのに、まだ飽きない。という事は、まだ足りていない。そんな想いが尽きなくて、仕事で休みを貰えんとすぐフランスに行ってしまう。今回(1月)は、パリでアパルトマンを借りてみた。エレベータが無い古い建物を選んだので、1週間の体力温存を考慮し3階の部屋に滞在した。洗濯機や暖房器具に苦戦しながらも、海外で普段と変わらない生活が出来たという事は私にとっても快適だった。そんな中で一番嬉しかったのが、スーパーやマルシェで食材を購入し、念願の自炊生活が出来たことだった。パリは、常設を含め曜日指定で開催されるマルシェがあちこちにあつて、見ているだけでわくわくしてしまう。せっかく冬に行つたので、今回は生牡蠣(殻付き)を購入してみた。私が購入した露店では、6種類程の牡蠣が売られていたので、私は「4種を2ケずつ購入したい」と片言会話でお願いすると、店主(女性)は、「12個じゃないのか？」と聞き返して来たので、「2個だけ」と言う目と目を丸くして怪訝そうな顔をしてブツブツ言い始めていたが、結局はちゃんと買わせてくれた。しかし、それからが問題の支払いである。牡蠣は、1個1.5ユーロ前後で種類によって値段は変わる。「いくらですか？」と聞くと、店主はメモとペンを取り出して、種類(単価)×2個の計算をして書き始めたのである。56、78...とかなり時間を掛ける。この書き終えた数字が43.3つ並び、さらに電卓で足し算をしてる。そして計算し終わって彼女の口から出た値段は、「10ユーロ」...私の暗算でも15ユーロ以上なのだが、こちらとしては嬉しい誤算(?)であり、同様に厳しいと言われているので、決しておまけしてくれただけでは無い気がする。しかし、何のための

メモと電卓だったのだらう。お店の人、口うるさくて、面倒だ！という態度丸出しだったが、最終的にあまり深く考えていないのか。何となく田舎で、函館の人に似ている...と思ってしまう。札幌の人は、そこまで計算したら合計を出すように思われる。勝手な憶測だが。もちろんその後、部屋でワインとブルターニュ州の牡蠣を堪能した。但し、開けるのは苦労した。

でもアパルトマンは、楽しいことばかりでは無い。週末深夜に大騒ぎをする住人や、空き部屋の工事作業で日中の騒音も酷く、壁に穴が空くのでは？とハラハラした日もあった。一番苦労したのは、建物へ出入りする1号玄関の施錠だ。ドアが2つあり、暗証番号が2つ共違う。しかも、暗証番号を押してから開錠しているまでの時間がとても短い。この特性が分からず建物から出る事が出来ず、誰かが入ってくるのを待っていたこともある。メモを見ないで暗証番号を押し、2枚の扉を開けてすんなりと入る事が出来たのは、滞在最終日であった。人は少しでも成長する。良い事も悪い事も自分の中に受け入れることが出来た時、また旅が止められなくなる。

今回は、(ノートルダムの鐘が聞こえる) 7階に挑戦しようか思案中である。今回は3階から、狭い螺旋階を通過して約24Kgの荷物(スーツケース)を降ろしたが、7階となると今から筋トレしないと無理だろう。日々、健康で体力を維持し続ける。旅の為に今年も頑張る！

歓迎会 野球観戦
2013年6月16日(日) 13時5分 札幌ドーム

【開催報告】

今回は、平成24年3月、25年3月に西高を卒業し『つゝじヶ丘同窓会会員』とされた下記の4名が参加しました。

* パソコン故障により多くの方にご案内が出来ず、竹林さん(17)・河合さん(17)・菩提寺(33)で対応しました。いつもご参加いただいたている皆様には申し訳ありませんでした。

【編集後記】

ようやく何とか会報を無事発行することができました。会報の執筆依頼に快く玉稿をお寄せ頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。とりわけ、戸根谷法雄さんからは長文の力作を頂き感謝申し上げます。

さて、今回から会報発行は幹事の堀田正英さんと山内美雪さん、そして私の三名体制でのぞみました。もちろん事務局長の菩提寺孝幸さんの協力をあおぎました。ただ、皆さんからの積極的投稿がほとんどなく、協力がなければ今後の会報発行の継続は難しいようにも思います。皆さんの協力をお願いしたいと思います。

田澤義公



氏家梨花さん (62回生)
(北海商科大学)
西高では吹奏楽部でした！
よろしくお祈りします。

星野琴美さん (63回生)
(北海道看護専門学校)
札幌でも元気にやっています。



田中葉梨奈さん (62回生)
(北海道薬科大学)
西高ではバドミントン部でした！
よろしくお祈りします(*^_^*)

工藤夕莉さん (63回生)
(北海道工業大学)
西高では生徒会執行部でした！
札幌でも相変わらずです☆

【維持費納入のお願い】

つゝじヶ丘同窓会札幌支部は、皆様の会費により運営されております。今年から郵便振込も可能と致しました(同封の用紙をお使い下さい)。年1,500円です。

つゝじヶ丘同窓会札幌支部

札幌市豊平区平岸2条6丁目
電話 011-831-4622(林)

(Mail) nishiko@tsutsujigaoka.net
(HP) http://www.tsutsujigaoka.net/